

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520599

研究課題名（和文） 日韓出土土器による 3・4 世紀国際交流の研究

研究課題名（英文） A study of Japan-Korea relationship in the 3rd and 4th century with focus on pottery

研究代表者

次山 淳 (TSUGIYAMA JUN)

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号：80260058

研究成果の概要：日本列島の弥生時代終末から古墳時代前期にあたる 3・4 世紀において、中国大陸・朝鮮半島をはじめとする東アジア諸地域との間にさまざまなかたちの交流があったことは、彼我の多様な考古資料と、『魏志倭人伝』等の文献史料の記載からうかがい知ることができる。本研究では、考古資料、なかでも土器を主たる材料として、当時の日本列島と朝鮮半島の交流のありかたを考察した。日韓双方の土器の分布状況の分析から、当該期には遺構の密集度の高い大規模な集落群を結ぶ交通路が形成され、対外交渉の場を博多湾沿岸におく極めて方向性の明確な通交体制が形成されていた様子が理解された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	300,000	1,800,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学、3・4 世紀、土器、国際交流

1. 研究開始当初の背景

(1) 弥生時代から古墳時代への移行期(3・4 世紀)における東アジア世界での国際交流の問題は、当該期における主要な研究課題となっている。例えば、いわゆる「倭国大乱」、そしてそれ以後の西日本諸地域の動向について、朝鮮半島からの鉄素材の入手を目的とする、近畿から瀬戸内海、北部九州にいたる集団関係の再編等が指摘されている。しかしながら、こうした議論の主たる材料は、初期段階の前方後円墳の分布、中国鏡の分布などであり、具体的な各地域の集団の動向については、十分な検討や検証がなされていない。また、『魏志倭人伝』には、当該期において

北部九州の玄界灘周辺地域におかれた対外交渉のための支配機構の存在が記されているが、この点についても考古資料をとおして具体的に検討されたとはいえない。

(2) 研究代表者は、当該期に畿内から九州に展開する畿内系土器のありかたに着目し、いくつかの検討を加えてきた。土器の型式学的な特徴を詳細に検討することにより、畿内系土器の中にも複数の集団が読み取れることや、瀬戸内海の中国地方側では備中以西に、四国側では伊予・高縄半島以西に拠点的な集落が形成されることを指摘した。

(3) 北部九州地域については、この時期に在来の土器様式から畿内系の土器様式に大きく変化することが指摘されており、これまで研究代表者が行ってきた分析方法をこのフィールドに適応することが有効であると想定された。また、玄界灘に面する福岡県西新町遺跡では、近年大規模な調査が実施され、多数の竪穴住居址とこれにともなう畿内系土器、山陰系土器、朝鮮半島系土器などが多数出土したことから、国際港湾都市的な性格をもつ遺跡であることが指摘されている。この遺跡の分析を行うことによって、北部九州の博多湾沿岸地域における朝鮮半島との交渉の実態を解明する手がかりが得られるものと考えられた。

(4) 日本列島で出土する朝鮮半島系土器、および朝鮮半島で出土する日本列島系土器の事例も近年増加しており、研究成果の蓄積がみられる。こうした成果を整理し、総合化することにより両地域の関係をより具体的にとらえられるものと考えられた。

2. 研究の目的

(1) 1に記したように、日本列島の弥生時代終末から古墳時代前期にあたる3・4世紀において、中国大陸、朝鮮半島をはじめとする東アジア諸国とのあいだにさまざまな人々の交流があったことは、彼我の多様な考古資料と、『魏志倭人伝』等の文献史料からうかがい知ることができる。

当該期の日本列島の政治的な中心地を大和・河内を含む後の「畿内」に求めると、こうした交流の地理的な枠組みを、畿内、大阪湾、瀬戸内海、北部九州（特に玄界灘沿岸地域）、香岐、対馬、および朝鮮半島といった主要なルート上に連なる地域とその周辺に定めることができる。

(2) 本研究は上記のような観点から、考古資料、なかでも土器を主たる材料として、当時の日本列島と朝鮮半島の交流のありかたを考察しようとするものである。そのための視点として、以下の5点を検討課題とした。

A. 畿内から瀬戸内海、北部九州、香岐、対馬へいたる畿内系土器の動態、およびその逆方向の各地域の土器の動きの把握と分析。

B. 日本列島で出土した朝鮮半島系土器の実態の把握と分析。

C. 朝鮮半島で出土した日本列島系土器の実態の把握と分析。

D. 交流の門戸としての玄界灘沿岸集落遺跡の内容の把握と分析。

E. 畿内への窓口である大阪湾沿岸集落遺跡の内容の把握と分析。

A～Eの作業を総合化することにより、交流のルート、その担い手、関係地域・遺跡等

の考察をおこなう。さらに、文献史料の記載との対比により、当時の国際交流のありかたをより具体的に記述することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するための方法と作業については、以下に示す3項目を設けた。

(1) 関係文献資料収集作業

以下の6項目に関しての基礎的な文献資料の収集をおこなう。

本研究全体にかかわる研究史の収集と整理（3・4世紀を中心に東アジアの交流に関わる文献史料・考古資料による研究成果を集成し検討する）。

研究目的Aに関して、西日本（特に北部九州・香岐・対馬）出土畿内系土器の事例集成。

研究目的Bに関して、日本列島出土朝鮮半島系土器の事例集成、研究成果の収集。

研究目的Cに関して、朝鮮半島出土日本列島系土器の事例集成、研究成果の収集。

研究目的Dに関して、北部九州、主として玄界灘沿岸の集落遺跡の事例集成、研究成果の収集。

研究目的Eに関して、大阪湾沿岸の集落遺跡の事例集成、研究成果の収集。

(2) 資料実態の把握

上記～の作業にもとづいて、主として発掘調査報告書を検索し、出土土器資料の集成をおこなう。土器実測図については、縮尺を統一したうえで、資料カードを作成する。このカードを基本台帳とし、出土土器の実態を把握する。

上記～の作業にもとづいて、集落全体の遺構配置、竪穴住居跡等の遺構、鉄製品等の出土遺物についても資料を収集・整理し、縮尺を統一したうえで、資料カードを作成する。

(3) 実地調査

(1)・(2)の成果をもとに実地調査を行う。確認すべき資料については、資料を所蔵する機関に赴き、土器の観察、実測図作成、写真撮影等の調査を行う。また、実地調査では、交流のルート、交通手段にかかわる歴史地理学的な視点も念頭に、遺跡の立地等の調査・検討もあわせておこなうこととする。

4. 研究成果

(1) 交流ルートの復原

岡山県南部地域で製作された吉備形甕の分布形態から、日本列島における交流の基幹ルートを読み取り、博多湾沿岸から周防灘をとおり松山平野・今治平野をへて備後東南部、吉備、播磨・摂津沿岸をへて大阪湾から河内湖、大和川、大和というルートを推定した。

吉備形甕の分布は、結節点となる遺跡・地域を結びながら、このルートの西端である福岡県西新町遺跡と東端の大和川下流域、および奈良県纏向遺跡に突出して認められることに特徴がある。

畿内の内部については、吉備形甕の分布に古墳の分布と対照的な地域があることを指摘したうえで、基幹ルートを大和川水系と考え、大和川水系の大和、河内を中心とする中心周縁構造を読み取った。さらに、瀬戸内海の東と西の領域的なちがいを明らかにしたのちに、畿内系統の土器の分布を重ね合わせ、吉備形甕で推定した基幹ルートとよく一致すること、基幹ルートが領域の境界に沿ったものであること、畿内系土器が領域の内側よりも外側に展開することを指摘し、このような方向性の明確な通交形態の形成を当該期の特質と考えた。以上の成果は、考古学研究会第53回総会において報告し、『考古学研究』第54巻第3号に発表した。

日本列島出土の朝鮮半島系土器について集合作業を行った成果を、『3・4世紀を中心とする西日本出土朝鮮半島系土器資料集成』として取りまとめた。この冊子には対馬・壱岐をのぞく九州以東の西日本において、現在までに公表された朝鮮半島系土器資料、77遺跡1183点余のデータを収録した。これらには、朝鮮半島からの搬入品と考えられているものに加え、模倣品など朝鮮半島系の要素が認められると指摘されたものも含めている。集成資料に関わる地名表、実測図に加え、関連する研究文献の一覧も付した。この作業から、当該期の朝鮮半島系土器の分布が玄界灘沿岸地域、なかでも博多湾周辺に集中すること、西日本全体で見ると上述のルートと重複する点の多いこと、3世紀後半以降、福岡県西新町遺跡に極度に分布が集中するようになることなどが理解された。

(2) 中継点となる遺跡の分析

全体的な交通路を把握した後に、この「瀬戸内海ルート」を構成した遺跡のありかたを分析した。以下にその主要なものを示す。

西新町遺跡 福岡県西新町遺跡は、福岡市の西部、博多湾に面した早良平野の東北端に位置する砂丘上の遺跡である。遺跡のすぐ北側には百道浜の元寇防塁があり、海岸線との近さを知ることができる。遺跡の範囲は、東西800メートル、南北300メートルにおよび、玄界灘沿岸の古墳時代集落のなかでも最大級の規模といわれている。2006年までに、21次におよぶ調査が実施されており、その間に検出された弥生時代終末から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡は、総数で400棟を超える。

この集落で特に顕著なことは、他の同時期の遺跡と比べて格段に多い朝鮮半島系土器の

出土と、竪穴住居跡に付設されたカマドの存在である。朝鮮半島系土器には、忠清道から全羅道系のもの、全羅南道から慶尚南道系のもの、そして慶尚道系のものといったように、朝鮮半島中南部の複数の地域のものがみられる。カマドはこの当時の日本では、いまだ普及していないものであるが、80軒以上の竪穴住居跡で確認されている。こうしたことは、朝鮮半島から渡来した人々の居住を示すものと考えられている。

国内の土器についてみると、この時期、博多湾沿岸の地域では、日常土器の多くが、庄内式・布留式とよばれる畿内の土器の特徴を備えていくが、西新町遺跡においても、このような畿内系統のものと山陰地方のものが卓越し、これに加え吉備など瀬戸内海地域の土器も認められる。

また、板状鉄製品や朝鮮半島系のガラス小玉鑄型、ガラス勾玉鑄型の出土などは、金属・ガラスに関わる手工業生産が集落内でおこなわれていたことも示唆している。一方で、漁撈活動を示す飯蛸壺や石錘も多量に出土し、対外交流の窓口であるとともに、きわめて多様な側面をもった集落であるといえる。

津寺遺跡と足守川遺跡群 瀬戸内海のほぼ中央に位置する吉備の地域では、現在の児島湾がかつて「吉備の穴海」と呼ばれる広大な浅海であり、海上交通の要衝となっていた。この穴海に注ぐ吉井川・旭川・高梁川の三大河川が形成した沖積地には、弥生時代を通じて数多くの集落が形成された。

古墳時代初頭になると、岡山市東部では旭川東岸の百間川遺跡群、西部の足守川流域では、岡山市津寺遺跡（津寺三本木・津寺一軒屋）、岡山市足守川加茂A遺跡、加茂B遺跡、倉敷市足守川矢部南向遺跡といった集落が発展する。外来系土器（遠隔地から持ち込まれた土器と、遠隔地の特徴をもつ地元で作られた土器がある）の出土数、鉄器の保有数などから、後者の遺跡群により対外的な性格をみるることができる。

津寺遺跡・津寺三本木遺跡・津寺一軒屋遺跡は、足守川左岸にある東西400メートル、南北475メートルの津寺微高地に立地する。津寺遺跡では、微高地上に竪穴住居跡252棟（建替も含めると288棟）が検出され、その東の低位部には水田が作られていた。集落のほぼ中央に、方形に柵を廻らせた桁行き四間梁行き四間の特異な掘立柱建物が検出されている。

外来系土器も多数出土しているが、瀬戸内海地域なかでも四国系のもの、そして山陰・畿内・西部瀬戸内・東海・北陸のものがある。また、150点ちかくの大量の鉄器の出土が注目されており、多数の鉄鏃に加え鉋、刀子、摘鎌、鎌、斧、鋤、鍬など器種も豊富である。特定の住居跡内からは、鉄鏃、刀子や、素材

とみられる棒状片など20点以上の鉄片が出土し、集落内において鉄器生産が行われていたこともうかがわれる。

高い集住度と鉄器の保有という特徴は、下流の足守川遺跡群においても同様に認められる。足守川加茂A遺跡・加茂B遺跡、足守川矢部南向遺跡は、足守川左岸の北から南へと連続する三つの微高地上に形成された集落である。加茂B遺跡では、古墳時代初頭の63軒の住居址を検出し、そのうち24軒から39点の鉄器が出土している。

足守川遺跡群のさらに下流には、当時の海岸線に接して倉敷市上東遺跡があり、この遺跡では、弥生時代後期の「波止場」状の遺構が確認された。しかし、古墳時代初頭になると集落の規模が縮小することから、港湾としての機能が上流部の津寺遺跡や足守川遺跡群へ移行したものと推定されている。

大和川下流域の遺跡群 当該期の大阪平野は、現在の大阪市から東大阪市の一部にかけて河内湖と呼ばれる淡水域が広がり、旧大和川の下流を構成する中小の河川が、北流しながらこの河内湖に注ぎ込んでいた。古墳時代初頭になると、弥生時代中期以来の中心的な集落は衰退し、これらの河川が形成した微高地上に、あらたに二つの大規模な遺跡群が形成される。

東側の旧玉串川と旧楠根川の間には、河内湖に面して西岩田遺跡があり、その南に萱振遺跡、さらに東西1キロメートル、南北2.5キロメートルにわたり、東郷遺跡・小阪合遺跡などを含む中田遺跡群が展開する。

一方、旧長瀬川と旧平野川の間には、東西2キロメートル、南北1キロメートルにおよぶ加美・久宝寺遺跡群が広がる。大和川と石川の合流部付近には、船橋遺跡がある。

これら大和川下流域の遺跡群には、前述のように、きわめて多くの吉備形甕がもたらされており、10点以上出する遺跡が9遺跡もある。外来系土器には、このほかに、山陰、阿波、讃岐、北陸、東海、南関東など各地の土器があり、朝鮮半島系土器の出土も知られている。

中田遺跡群や加美・久宝寺遺跡群では、居住域に加え、方形・前方後方形周溝墓によって構成される墓域が非常に高い密度で検出され、居住域の縁辺部には水田域が広がることも明らかになっている。また、小区画内に畝をつくった畑作跡も確認された。

広大な遺跡群の特徴を短く整理することは難しいが、この地域の対外的な性格を見るうえで重要な久宝寺遺跡の二つの事例をあげておく。

まず、準構造船の船材の発見である。準構造船は、丸木船を船底とし、上部に板材を組み合わせたものである。出土した船材は船底部、舷側板、縦板に相当し、すべてスギ材を

用いている。大木を割りぬいた船底部は全体の四分の一程とみられるが、長さ3.0メートル、最大幅1.24メートルをはかる。波除けとなる縦板は、長さが1.7メートルある。久宝寺遺跡での実物資料の発見は、その後の弥生・古墳時代船舶研究に強い影響を与えた。

二つめは、自然流路にそってつくられた堤で、敷葉工法が用いられていたことである。敷葉工法は、底に枝葉を敷きこむことによって積み上げた土砂の安定をよくするもので、中国・朝鮮半島から伝わった土木技術と考えられている。

纏向遺跡 奈良県纏向遺跡は、桜井市の北部、三輪山の西麓に広がる東西約2キロメートル、南北約1.5キロメートルの大規模な集落遺跡である。初瀬川の支流である烏田川と纏向川にはさまれた扇状地上に立地し、河道によって区分される五つの微高地(草川・巻野内・太田北・太田・箸中)上に遺跡が展開する。2007年までに150次をこえる調査が行われているが、遺跡が広大なこともあり、調査面積は全体の5パーセント程にとどまっている。このため、遺跡全体の構造が明らかになるまでにはいたっていない。

纏向遺跡の特徴を、寺沢薫は以下のように整理している。イ 三世紀初めに突然出現し、破格の規模をもつ集落遺跡であること。口搬入土器の比率が高いことに加えて、土器の移動元が南関東から九州までと広範囲である。ハ 農耕具などの食糧生産用具が乏しく、土木具の出土が目立つ。また、矢板で護岸された長大な運河がつくられるなど、高度な土木技術が用いられている。ニ 鉄滓や大形の鞆羽口が出土しており、遺跡内での鉄器生産が知られる。ホ 導水施設や弧帯文をもつ遺物、特殊器台・壺など王権祭祀に関わる遺構・遺物が多数認められる。ヘ 遺跡内には、全長280メートルの箸墓古墳をはじめとして、石塚古墳・東田大塚古墳・勝山古墳・矢塚古墳・ホケノ山古墳といった最初期の全長100メートルちかい大型前方後円墳が、居住空間に接して造営される。

こうした特徴をもとに、纏向遺跡に古墳時代初頭の王権の所在を求める意見は多い。吉備形甕の分布の東端に纏向遺跡が位置することは、「瀬戸内海ルート」と王権との結びつきを示唆している。

纏向遺跡では、南関東、東海(駿河・尾張)・北陸・近江・河内・北四国・吉備・山陰・西部瀬戸内・九州など非常に多くの地域の土器がみられる。また、こうした土器の地元の土器に対する比率も、地点によっては、15パーセントを上まわる場合があり、量的にも同時期の他の集落に比べ突出したありかたを示している。

(3) 古墳時代前期初頭の通交体制について

3・4世紀にあたる古墳時代前期初頭には、(2)に示したように、遺構の密集度が高い大規模な集落群をむすぶ交通路が形成され、各種の生産技術や土木技術がこのルートを通じてもたらされたことが理解された。

この時期に特徴的なことは、朝鮮半島系の人々の痕跡が博多湾周辺に集中し、瀬戸内海以東の地域ではそれが極めて乏しいことである。朝鮮半島系土器の分布と、吉備形甕の分布を重ねあわせれば、長距離の物資の移動を集団が区間を分けて分担していたと考えることもでき、両者の交点は西新町遺跡となる。さらに、朝鮮半島系土器の極度の集中や遺跡内の住居に多数つくられたカマドが周辺集落に普及しないことは、朝鮮半島系の要素に対する一定の管理がおこなわれたと考えることもでき、『魏志倭人伝』の記述と比較可能な事象である。北部九州における土器の畿内化の現象は、博多湾沿岸ばかりでなく有明湾沿岸地域にもおよび、この時期の北部九州にみられるきわめて特徴的な現象である。このように前期初頭に形成された通交体制は対外交渉の場を博多湾沿岸におき、なかでも西新町遺跡を中心とするきわめて明確な方向性をもったものであったことがうかがわれる。

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

次山 淳、古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器と交流、考古学研究、第54巻第3号、2007、pp.20 - 33、査読無

[学会発表](計1件)

次山 淳、古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器と交流、考古学研究会、2007.4.22、岡山大学

[その他]

次山 淳、3・4世紀を中心とする西日本出土朝鮮半島系土器資料集成、平成18～20年度科学研究費補助金(基盤研究(C))『日韓出土土器による3・4世紀国際交流の研究』成果報告書、2009年、120頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

次山 淳(TSUGIYAMA JUN)

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号：80260058